

# バローチスターン交流の現在

村山和之 共同研究員／和光大学非常勤講師

## —はじめに

2009年度は和光大学の研究プロジェクトによるパキスタン調査が始まって20周年を迎える年となった。パキスタンといっても、その研究対象の中心はモヘンジョダロでもガンダーラでもなく、パキスタン南西部に位置するバローチスターン州における宗教的図像という前代未聞の分野である。ソ連による侵攻以前に二回にわたるアフガニスタン調査に実績を残していた和光大学は、その10年後、新たなフィールドワークの可能性を求めて再び南西アジアの地を目指したのである。

和光大学象徴図像研究会（代表：前田耕作）による初めてのバローチスターン調査隊が1989年9月にその第一歩を標して以来、1990年、1996年、1997年、1998年そして1999年の計6回を正式な大学チームとしての調査・訪問に費やし、1995年にはバローチスターンから研究者を二人お招きして本学でシンポジウムを開いた。それらの報告は和光大学発行による、『象徴図像研究』VOL. III-XIと『バローチスターン調査概報』、『アジア南道の歴史と文化』そして『バローチスターン州ジャラーワーンおよびラス・ベーラ地域における民俗・宗教的図像の研究』に詳しい。どの訪問も調査も大きな成果を得られたことに疑いの余地はない。

その現地調査の成功は、本学のチームだけで実現したわけではない。バローチスターン州都クエッタ市にあるパキスタン国立バローチスターン大学 [University Of Balochistan (UOB)] のパキスタン研究センター [Pakistan Studies Centre]、言語学科 [Dept. of Languages] そしてバローチスターン研究センター [Balochistan Study Centre] 等の教職員諸氏の交流と協力なしではありえなかったであろう。

1989年、はじめての訪問時、まったく何のアポイントメントも取らずに飛び込みで大学を訪問し、自己紹介と訪問目的を何度も告げて構内を右往左往してゆく

うちに辿りついたパキスタン研究センターから全てが始まった。当時のセンター長は、のちに副学長（実質上は学長 [Vice Chancellor]）になる経済学専攻のパハドゥル・ハーン・ローデーニー教授 [Bahadur Khan Rodeni] で、大阪大学で学ばれたことから挨拶の第一声が日本語で我々は驚かされた（写真1）。そして彼とほぼ同世代のベテラン教官たち、パシュト文学研究の第一人者シヤール・カーカル教授 [Siyal Kakar]、パローチ語および文学の世界的権威アブドゥッラー・ジャン・ジャマルディーニー教授 [Abdullah Jan Jamaldini]、そしてモントリオールのマギル大学からパローチ語の教科書を出した言語学の専門家ミール・アキール・ハーン・メンガル教授 [Mir Aqil Khan Mengal] たちが研究を仕上げつつ若手教官を鍛えていた時代である。



写真1 パハドゥル・ハーン博士、2009年UOBIにて。

先生方は全員、パローチスターン地方の二大主要民族パローチとパシュトゥーン出身者からなり、双方とも民族の美法として誇る客人歓待の礼を尽くして、私たち外国人旅行者を助けて下さった。その恩師の指示によって実質的に現場を案内して下さいた生え抜きの講師と職員の方々に支えられて、私たちのフィールドワークは何の支障もなく目的を達成できたといえる。

### ——パローチスターンとの新たな交流にむけて

この両大学間の交流の経緯は「和光・パローチスターン大学交流史と新学科」<sup>1)</sup>に既に記したが、さらに10年たった今、その交流の成果を再確認し新たな共同研究の可能性を追求するためにも、和光大学総合文化研究所を基盤として、再びパローチスターンに因んだ報告を行なってゆく必要性を感じている。今現在、治安が悪化しイスラーム原理主義グループとパローチ民族主義グループによる騒乱が報じられるパローチスターン地方について、独自の資料の蓄積と人材を有する機関が、日本では事実上和光大学だけであることの再自覚をも促したい。

そこで20周年となる両大学間交流を記念し、今後展開してゆくさまざまなパローチスターン紹介イベントの第一弾として、ここでは寄稿された研究論文、パローチスターン研究センターのディレクターを務めておられたアブドゥル・ラザーク・サービル博士 [Abdul Razaq Sabir]（写真2）が書き下ろして下さった英文の論考“Taj Muhammad Tajal——The Mystical Poet of Brahui: Life and Achievement”（「タージ・ムハンマド・タージャル：ブラーフイ族の神秘主義詩人、その生涯と業績」）を

1) 和光大学総合文化研究所年報『東西南北 1999』1999年3月、pp.130-137。



写真2 アブドゥル・ラザーク・サービル博士（左）と、ヌール・ムハンマド・バルワーナ氏（右）。1994年、マストゥングにて。

掲載する。

サービル博士は1995年に和光大学が招聘した研究者の一人として講演し、『象徴図像研究』にも寄稿、専門はブラーフイー語文学史である。19世紀を生きたブラーフイー族の詩人タージャルの作品を博士はフィールドワークによって収集してきた。ブラーフイー語による研究成果は既に刊行されているが、英語による成果の紹介は皆無であった。日本で初めて紹介されるタージャルの世界を少しでも味わっていただきたいと考える。

これに先だって、バローチスターン大学で博士の下でブラーフイー語を学んだ村山和之<sup>2)</sup>が、ブラーフイー語とブラーフイー族について紹介し、パキスタンの神秘主義詩人たちとの関係に触れながら、タージャルの生涯と業績について概要を記す。

## ——パキスタンの神秘主義詩人とタージャル

### 1. タージャルの生きた土地と時代

そもそもタージャルとは、本名タージ・ムハンマドの愛称である。ブラーフイー族の母語であるドラヴィダ語に属するブラーフイー語の接尾辞-1を伴ったタージ [Taj] がタージャル [Tajal] となった。タージル [Tajil] と呼ばれることもある。ブラーフイー族はイラン系言語パローチー語を母語とするパローチ族とともにパローチ民族を構成する。

タージャル研究の第一人者であるサービル博士が1988年、タージャルの子孫であるマラング（遊行者）：ゲッラー・ファキールに行なった聞き取り調査によれば、タージャルは、バローチスターンでもインダス渓谷に位置する平地部カッチー地方 [Kachhi] のバグ [Bhag] 近郊の村ブダに1833年に生まれ、同地に1944年葬られた。ブラーフイー族の中でも有力なバングルザイ部族を構成する一支族ブドゥザイに属するタージャルの父ファキール・ムハンマド・サディークもまた詩人だったというが、彼の作品は確認されていない。

低地のカッチー地方とは、山岳高地のホラーサーン地方とともに、遊牧をベースとする人びとにとって重要な生活圏の半分である。ホラーサーン（北部のサラ

2) 最新のパローチ関係の論考は、「パローチ民族と六信五行」『和光大学表現学部紀要』第10号に掲載。

ーワーン地方と南部のジャーラーワーン地方からなる)が夏营地なのに対して、カッチーは冬营地である。現在においても、秋から冬を暖かいカッチー地方で過ごして家畜に子を産ませ、春と夏を涼しいホラーサーン地方で半農半牧生活を送る遊牧民は多い(写真3)。遊牧こそしなくとも、双方に自分の家を持ち、季節によって住み分けているブラーファイ族、パローチ族は少なくない。タージャルたちはホラーサーンではマストウング [Mastung] に夏営していた。



写真3 ホラーサーン地方のブラーファイ農民たち

カッチー地方はブラーファイ語だけでなく、さまざまな言語を話す民族が共棲しており、パローチー語、スィンディー語、サラエキー語に自然に親しむマルチリンガルを生み出しやすい土地である。タージャルがウルドゥー語とペルシア語をこれらに加えた六言語を操る詩人であることは、これらの風土と密接な関係があることをサービル博士は指摘している。

タージャルは、イギリスがアフガニスタン戦争(1838-42、1878-80)を契機にインドやパンジャブからパローチスターンに進出してきた時代の波を経験している。パローチスターンは、サラワーン地方の城下町カラートを都に部族連合



の盟主としてハーン（藩王）を戴くカラート藩王国が概ね支配権を握っていた。アフガニスタンのカンダハールへ攻め込む軍事的要衝としてバローチスターンを支配下に置きたいイギリスは、1839年、カラート城を攻略し藩王メヘラブ・ハーン二世を殺害する。それ以来、様々な条約が結ばれ、バローチスターンにおけるイギリスの権益が増大する中、最終的にカラート藩王国はイギリスの保護国にされてしまう。タージャルはその時代を生き抜き、バローチスターン・カラート藩王国が1947年8月15日に独立を宣言した3年前鬼籍に入っている。

## 2. イスラーム神秘主義との交わり

父の仕事を手伝い農作業や放牧をしていたタージャルは、イスラーム教の教育を移動先のモスク等で受けていた。詩作も幼少期から始めていたが、彼の作品が成熟期を迎えるのは40代の頃で、インドやスィンド各地の聖者廟や聖地巡礼の旅から帰った後である。彼がどのような神秘主義教育を受けその思想を受容したかは作品からうかがうしか術はない。

ここで、南アジアの神秘主義、イスラーム神秘主義文化について多少触れておく必要がある。

イスラーム神秘主義は通称スーフィズム [Sufism]、スーフイーとは神秘主義を実践する修行者を表す。13世紀以降、つまりデリーを中心とした奴隷王朝時代からムガル帝国初期まで、南アジアのイスラーム教はスーフイーたちの活動によって定着していった。バラモンたちが土着の神々を取り入れてヒンドゥー神話と儀礼の体系をなしていったように、スーフイーたちも南アジア的な聖者崇拜や舞踏・音楽等のパフォーマンスを吸収しながら緩やかにイスラームの教えを広めていった。

高德で奇跡力が強いことで人気のあるスーフイー聖者が亡くなると墓に葬られる。墓は、死してもなお聖者の体から発せられると信じられている聖者の祝福の呪力「バラカ」を授かり現世利益を追求しようとする善男善女たちの参詣者を集め、聖者廟へととなってゆく。特に聖者の命日祭はウルス（結婚式）と呼ばれ、聖者の魂が神と合一したとされる祝福日として多くの巡礼者を集めている。

哲学者や知識人であるスーフイー聖者の中には、神や師に対する愛の歌をペルシア語やウルドゥー語、そして土地の民族語で作った詩人も多い。そこでは、自分とその愛の対象を結ぶ道はあらゆる障害を排除した純粋な一本道として表され、現実の苦しみや悲しみを愛の悲しみとして描き、男女の結びつきであるかのように神との合一体験が綴られる。

スーフイー詩人たちが、自分の思想を表現する際にメタファーとして用いたのが、ダースターンやキッサと呼ばれる土着の民話・伝説である。特に、悲恋物語の主人公たちは好んで用いられ、死して恋人（神）と合一するクライマックスに向けて、スーフイーの修業体験と主人公たちの苦悩体験が重なるように描かれて

ゆく。

現在のパキスタンにおいては、パンジャーブのシャー・フサインやバーバー・ブッレー・シャー、スィンドのサチャル・サルマスト、シャー・アブドゥル・ラティーフたちがこの分野で有名なスーフィー詩人・聖者である。彼らの作品は旋律をつけて歌うことを目的に作られたカーフィー [Kafi] という押韻短詩型が多い。それらはタージャルに強い影響を与えただけでなく、今もなお現代の音楽人の想像力を刺激し、創作活動に力を与え続けているといえる。

カーフィーは作らなかったが、ペルシア語の詩人として、神秘陶酔舞踏を修道儀礼に用いた聖者としてパキスタン中で人気があり、バローチ民族は自らの守護聖者と認めているラール・シャハバズ・カラन्दル [Lal Shahbaz Qalandar] (1177-1274) を讃える詩をタージャルは作っている。数あるスーフィー聖者からタージャルと直接関係の深い一人として紹介したい。

本名ムハンマド・ウスマーン・マルワンディー [Muhammad Uthman Marwandi]、イラン西部 (アフガニスタン説もあり) マルワンドで生まれ、大旅行の末ムルターンに至り、スフラワルディー教団のバハーウル・ハック師の修道場に入る。インド各地の聖者と交わり、新たなる布教拡大のためスィンドのセヴィスターン (セハワーン) へ。ヒンドゥー王の迫害のなか布教につとめ、独身のまま死去 (シャーバーン月21日) する。神秘陶酔舞踏ダンマールをサマア (音楽を用いた修道儀礼) に取り入れる。現在でも毎日、夕方のマグリブ礼拝の後に聖者廟 (ダルガー) の中庭でダンマールが踊られる。古いところでは1357年の『Tarikh-e Firuz Shahi』 (Zia al-din Barani 著) に、この舞踏について記述があるという。舞踏儀礼としてのダンマールの創始者として信じられている。またこの聖者を信奉するラール・シャハバズ派の始祖である。この宗派はスフラワルディー教団のベーシャラ [beshara] (正統的イスラーム教に同調しないもの) 系一分派とされる。

ラール・シャハバズ・カラन्दルが詠んだとされるペルシア語の定型詩ガザルの一部を下記に紹介する。

ze ishq-e dost har sa't darun-e nar miraqsam  
真の友への愛ゆえつねに 炎のなかに私は踊る  
gahe bar xak mi 'galtam gahe bar xar miraqsam  
ときには土に転がりまみれ 茨をふんで私は踊る  
biyai mutrab-e majlis sama'-e zauq ra dardeh  
来たれ楽士よ、この楽宴に 妙なる色の喜び満たせ  
ke man az shadi-e vaslash qalandarvar miraqsam  
至福のなか一つになれる カラन्दルとして私は踊る

タージャルはブラーフイー語、バローチー語とスィンディー語で多くの詩を残

した詩人である。ブラーフイー語に関しては、現代ブラーフイー語と異なった古典的なブラーフイー語を用いているのが特徴である。バローチー語では部族間抗争を主題とした戦争詩を残している。

彼の作品は、戦詩をはじめとする様々な主題からなる作品と神秘主義的思想を歌った作品の二分野からなっている。

特に神秘主義詩は、パンジャブのバーバー・ブッレー・シャーにも共通する、教条的なイスラームに凝り固まったムッラー [mullah] (聖職者) やカーズイー [qazi] (法官) たちを「ムッラーとカーズイーの言葉を信じることなかれ」と歌って批判している。アッラーの「ア」の字——アラビア文字の最初の文字——であるアレフ“ا”に全てがある、神の知識を誰かから学ぼうとするな、神よりただ受け入れよ。バーバー・ブッレー・シャーのそのような思想が読み取れる、パンジャブ語で歌われる彼のカーフィーを参考までに添える。

ilmon bas karen o yar

莫迦たれ 捨てよ 学問

ik alef tere darkar

ただ アレフ一字 こと足る

バローチ民族はその民族的特徴として、イスラーム教徒ではあるけれど信仰の形は個人の秘部としてその自由を尊重し合い、聖職者や法官によって社会的制限や強制が加えられることを何よりも嫌う。もともとアンチ聖職者・法官の立場にあるタージャルが、さまざまなスーフィー文芸との交わりによって、語る表現技法を磨きブラーフイー語でスーフィー詩を詠んだという点が面白いところである。

現在サービル博士は、様々な言語で歌われたタージャルの詩を分類して全集を編む作業にかかっているという。完成を待つ間、しばし短い英文によるタージャルの紹介を通してバローチスターンと交流してゆきたい。そして来年度は和光大学側からも英文の論考を、バローチスターン大学の研究紀要へと寄稿する予定である。

[むらやま かずゆき]